《幼児教育》

幼児が思いや考えを伝え合う喜びを味わうための環境構成と援助の工夫

～園生活の体験からごっこ遊びへの展開を通して～

那覇市立小禄南こども園　保育教諭　島尻勝紀

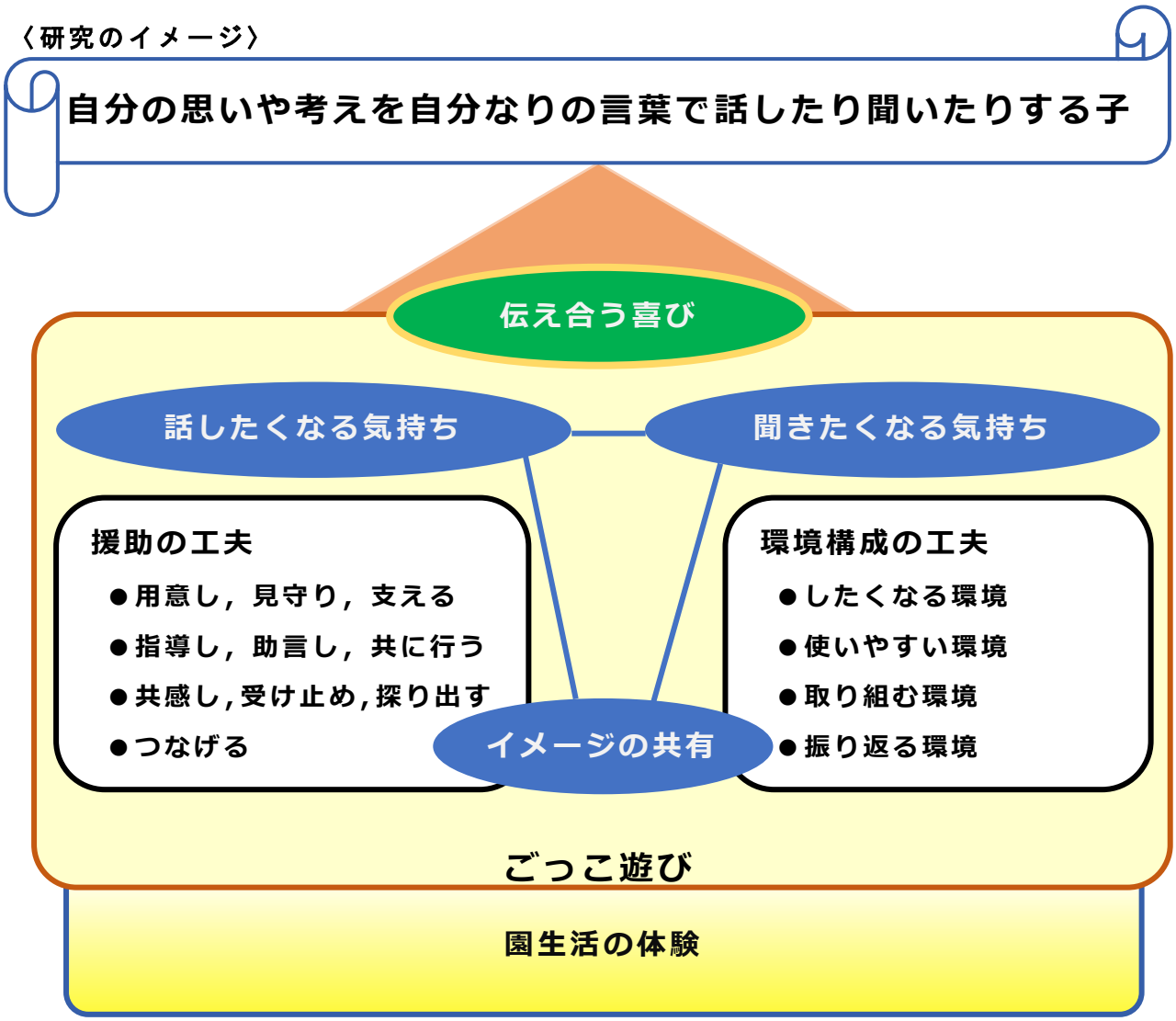
〈研究の概要〉

幼児は，園生活の中で様々な思いをもち，その思いが高まると親しい人に伝えたくなる。さらに自分の話を聞いてもらうことにより，自分も人の話を聞こうとする気持ちが育ち，伝え合う喜びにつながると考える。

本研究では，園生活の体験からごっこ遊びへと展開していく活動の中で，言葉を育む環境構成と保育教諭の役割と援助について視点を設け，保育実践を行った。

幼児が共通のイメージを持ち，ごっこ遊びを楽しむ中で，思いや考えを伝えようとする姿が見られた。また，ごっこ遊びを進めることで，「遊びたい」という意欲につながり，「話したい･伝えたい」気持ちになり，伝え合う喜びにつながった。

〈研究のイメージ〉



目　次

Ⅰ．テーマ設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

Ⅱ．研究目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

Ⅲ．研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

Ⅳ．研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　１　思いや考えを伝え合うために
　２　ごっこ遊びとは
　３　環境構成と援助について
　　(1) 心を動かされる体験とは
　　(2) 遊びへの展開
　　(3) 体験したことを話したくなる・聞きたくなるための環境構成と援助

Ⅴ．保育実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　１　保育計画
　　(1) 園児の実態
　　(2) 保育計画
　２　実践「思いや考えを伝え合って遊ぶ」
　　(1) 実践事例
　　(2) 幼児の変容(抽出児)
　　(3) 考察

Ⅵ．成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
　１　成果
　２　課題

《主な参考文献》

《幼児教育》

幼児が思いや考えを伝え合う喜びを味わうための環境構成と援助の工夫

～園生活の体験からごっこ遊びへの展開を通して～

那覇市立小禄南こども園　保育教諭　島尻勝紀

Ⅰ　研究テーマの設定理由

平成 29 年３月に告示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下教育・保育要領)には，新たに「主体的・対話的で深い学び」の視点が示され，園児が他者との対話を通して深い学びへ向かう過程が重視されている。また，第２章第４節領域「言葉」の解説には，園児は，園生活の中で心を動かされる体験を通して，様々な思いを持ち，その思いが高まると親しい相手に伝えたくなると示されていることから，園児にとって心を動かされる体験をすることが，対話を通して深い学びに向かうためには重要だと言える。さらに，園児は自分の話を聞いてもらうことにより，自分も人の話を聞こうとする気持ちが育ち，伝え合う喜びを味わうようになると記されていることから，園児は「心を動かされる体験」を通して，自分なりの言葉で話したくなったり，相手の話を聞きたくなったりしながら，思いや考えを伝え合う喜びを味わうようになると考える。

本園の幼児の実態としては，気の合う友達と言葉を交わしながらイメージを共有して遊ぶ子がいる一方で，自分の気持ちを伝えられず，遊びを傍観している子や言葉によるイメージの伝え合いが難しい子，周囲の大人が言いたいことを汲み取ってしまい，自分の言葉で伝える事に必要性を感じていない子がいる。また，他の幼児が話していても自分の話を伝えようと相手の話を遮ったり，一方的に話し続けたりする子がおり，言葉でやり取りする姿には個人差が大きいという実態がある。私自身の保育は，幼児が心を動かされる体験をする中で，その体験を他者へ伝えたくなるような環境構成や援助が十分ではなかったと考える。幼児同士が互いの思いや考えを伝え合うための環境構成と援助について，さらに工夫していく必要を感じている。

本研究では園生活の体験からごっこ遊びへ展開していく活動を取り上げ，実践研究を行う。幼児が経験してきたことを，ごっこ遊びへつなげていくことで，幼児の相手に思いや考えを伝えたい，相手の考えを聞いてみたいという気持ちが育まれるのではないか，また，幼児が自分の話を聞いてもらう体験を積み重ねる中で，自分も人の話を聞こうとする気持ちが育まれ，伝え合う喜びを味わえるのではないかと考える。

そこで園生活の体験から，ごっこ遊びへの展開を通して，幼児が思いや考えを伝え合う喜びを味わうための環境構成と援助の工夫について研究したいと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

幼児が，園生活の体験から共通のイメージを持ち，ごっこ遊びを楽しむ中で，思いや考えを伝え合う喜びを味わえるような環境構成と援助の工夫について，実践的に研究する。

Ⅲ　研究構想図

【本研究でめざす子ども像】
自分の思いや考えを自分なりの言葉で話したり聞いたりする子

【研究テーマ】
幼児が思いや考えを伝え合う喜びを味わうための環境構成と援助の工夫
～園生活の体験からごっこ遊びへの展開を通して～

【研究目標】
幼児が，園生活の体験から共通のイメージを持ち，ごっこ遊びを楽しむ中で，思いや考えを伝え合う喜びを味わえるような環境構成と援助の工夫について，ごっこ遊びを通して実践的に研究する

【研究方法】
1　こども園教育・保育要領を踏まえ理論研究を行う
2　思いや考えを伝え合うために
3　ごっこ遊びとは
4　環境構成と援助の工夫について
【実践事例】
「思いや考えを伝え合う喜びを味わいながら楽しむごっこ遊び」
5　保育を省察し，幼児理解と環境構成，援助が適切であったかを確認し改善を図る

【社会背景】　【幼児の実態】　【教師の願い】　【保育の反省と課題】

Ⅳ．研究内容

1　思いや考えを伝え合うために

小野(2010)は，伝え合う力とは，自分の経験を言葉で表現する力だけではなく，相手の行動に注意や関心を向け，相手の思いや考えを理解する力でもあると述べている。教育・保育要領の領域「言葉」のねらいにおいても「人の言葉や話などをよく聞き，自分の経験したことや考えたことを話し，伝え合う喜びを味わう」と示されている事から，幼児が相手の話を聞いたり，自分の考えを話したりしながら，思いや考えを伝え合う喜びを味わうことが大切である。

また，山本(2010)は５歳以降になると自分が今まで経験してきたことを土台にして想像力をふくらませ，相手が話している内容と同じイメージを共有することが出来るようになるとし，同じイメージを持つことが伝え合う気持ちを育てるために必要であると論じている。このことから，幼児が思いや考えを伝え合うためには，自分なりの言葉で表現しながら，園生活における共通の体験をもとに，友達とイメージを共有する中で，自分の思いや考えを話したり，相手の話を聞いたりすることで，幼児の伝え合う気持ちが育まれると考える。

2　ごっこ遊びとは

ごっこ遊びとは,「子どもが日常生活の中で，経験したことを模倣して現実の遊びで再現し象徴的に遊ぶこと」と保育用語辞典(2016)にある。幼児は，園生活において友達と共通の経験や感動を伝え合う中で，次第にイメージを共有し合いごっこ遊びを楽しむようになる(教育・保育要領「表現」解説)。福崎(2010)はごっこ遊びの世界から，

イメージを共有し，自分の思いを伝えたり，友達と話し合ったり，協議したりしながら，友達関係を調整，深めていく力が培われ，ごっこ遊びの中でことばも深められていくと論じている。

本研究では，幼児が伝え合う喜びを味わうために，園生活の体験からごっこ遊びへ展開していく保育を実践する。幼児は，園生活における共通の体験をもとに，イメージを共有することで，ごっこ遊びを楽しみながら言葉による伝え合いを楽しむようになると考える。

3　環境構成と援助について

(1) 心を動かされる体験とは

教育・保育要領解説の中に，「園児が心を動かされる場面は，必ずしも大人と同じではなく，日常の何気ない生活場面で心を揺り動かしている。」とある。また，「心を動かされる」とは，驚いたり，不思議に思ったり，嬉しくなったり，怒ったり，悲しくなったり，楽しくなったり，面白いと思ったりなど，さまざまな情動や心情がわいてくることであり，このような体験が，次の活動への動機づけになり，その後の体験につながりをもちながら，体験が深まっていくと示されている。

開(2011)は，心を動かされる体験について，保育教諭は，幼児の心の感動を偶然に待つのではなく，保育教諭が自ら環境の構成や援助の工夫を行う必要があると述べている。これらのことから，保育教諭は幼児の心を動かされる体験を捉え，幼児の良き共感者となり，日常生活の体験が次の活動への動機づけになるよう意図的・計画的に保育を実践していくことが重要であると考える。その中で，幼児が伝え合う喜びを味わうための環境構成と援助の工夫について，考えていく必要がある。

(2) 遊びへの展開

教育保育要領解説の第１節 1(2)②において，園児一人一人が主体性を発揮して活動を展開していくために，園児の立場に立った教育及び保育の展開の重要性が示されている。また，第１節 1(4)③には，自発的な活動としての遊びにおいて，園児は心身全体を働かせ，様々な体験を通して学びに向かうことが示されており，園児が主体的に学びへ向かうためには，遊びを通した保育を展開していく必要がある。

河邉(2012)は，保育は子どもを理解することから始まるとし，理解と関わりの中で，保育を展開していくような思考のプロセスについて論じている(表１)。本研究において，保育教諭が幼児の姿を捉え，園生活の体験からごっこ遊びへと展開していく過程において，幼児の内的動機を読み取り，幼児が主体的に活動を展開していく中で，伝え合う喜びが味わえるような環境構成と援助の工夫について実践する。

表１．保育を展開していくための保育者の思考のプロセス

①子どもたちは遊びの何に(人･モノ･その他)面白さを感じているのか，内的動機を読み取る
②そこでモノや他者とどのような関係を結んでいるのかを理解し，子どもが抱えている課題を見出す
③課題を乗り越えるのに必要な経験は何かを長期的展望のなかで導き出す
④それに基づき，具体的な援助としての環境を構成する
⑤①～④を常に実践のなかで省察し，実践に戻していく

河邉(2012)を参照

(3) 体験したことを話したくなる・聞きたくなるための環境構成と援助

横山(2018)は，言葉による伝え合いが育まれる過程について信頼関係が構築された「伝えたい人」がいることが重要であると述べている。また，岡田(2008)は，「子どもが，表現して伝えたいという気持ちを，保育者が落ち着いてきちんと受けとめて理解することを続けていくことで，子どものなかに相手の話を聞こうという態度が育っていく」とし，幼児が受けとめられる経験の重要性について示している。これらのことから，幼児が安心して話すことができる雰囲気や，心置きなく言葉を交わすことのできる信頼関係が構築されていることが必要であるといえる。さらに，様々な生活の場面において，幼児が伝えたくなるような経験をする中で，「相手の気持ちや行動を理解したい」という気持ちを持たせることも大切だと考える。

無藤(2018)は，保育者には園の環境を保育の場へと転換する役割があると述べている。また，中坪(2013)は保育者が構成する環境の中で言葉を育む環境構成に視点を置き４つのキーワードでまとめている。

本研究では，心を動かされる体験をする中で，幼児が伝えたくなる，聞きたくなるための保育者の援助について，無藤(2018)の保育者の役割，岡田(2008)の保育者の援助と中坪(2013)の子どもの言葉を育む環境構成を参考に以下にまとめた(表２)(表３)。

表２.保育者の役割と援助

役　割		援助の内容
ⓐ	用意し，見守り，支える	幼児の姿を捉え，困った時の相談相手や遊びが面白くなるような提案をする等，様々な場面において遊びを支える
ⓑ	指導し，助言し，共に行う	幼児の思いや発見を尊重し，体験を深められるよう働きかける
ⓒ	共感し，受け止め，探り出す	幼児の気持ちを捉え感情を共にし，幼児の視点に立っての深い共感的理解をもとに対応し，思いを探り出す
ⓓ	つなげる	遊びの場面や，全体に伝える場面において，幼児が，体験したことを友達に伝え合い，互いに考える場面を持ち，個と個を繋げていく

無藤(2018)と岡田(2008)を参考に筆者作成

表３.子どもの言葉を育む環境構成

環　境	環境構成
ア　子どもがしたくなる環境	・季節感を感じる環境 ・興味関心が引き出される環境 ・多様な表現を促す環境
イ　子どもが使いやすい環境	・高さや位置に配慮した環境 ・多様な素材の中から自由に選ぶことが出来る環境 ・自由に手に取ることが出来る環境
ウ　子どもが取り組む環境	・心地よい雰囲気の環境 ・他児との交流が促され，子ども同士が経験を共有できる環境
エ　子どもが振り返る環境	・活動の軌跡や足跡が残された環境 ・自分自身の存在や成長，友だちの存在や成長を実感できる環境

中坪(2013)を参考に筆者作成

Ⅴ．保育実践

１　保育計画

(1) 園児の実態（４月から９月までの姿）

本園の幼児の実態として，気の合う友だちと遊ぶ子がいる中で，自分の気持ちを

言葉で表現し伝えることができない子，周囲の大人が汲み取ってしまい，言葉で思いを伝える必要のない子がいる。反面，人の話を遮って自分の話をしようとする子等，話したり聞いたりする姿には，個人差が大きいという実態がある。

(2) 保育計画

実　践	○ねらい　・内容
①これまでの遊びを思い出してみよう (11 月 25 日)	○体験を振り返りこれまでの園生活に関心を持つ ・園で体験してきたことをふり返る
②自分がイメージした物になりきるごっこ遊び(11 月 26 日～11 月 29 日)	○友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう ・思いや考えを自分なりの言葉で表現し伝える
③イメージを共有し進めるごっこ遊び (12 月 3 日～6 日)	○友達と一緒にイメージを共有し遊ぶ楽しさを味わう ・気の合う友だちと一緒に考えたごっこ遊びを楽しむ
④思いや考えを伝える喜びを味わいながら楽しむごっこ遊び(12 月 10 日本時)	○友達とイメージを共有し，ごっこ遊びを楽しむ ・友達と一緒に，自分達で考えたごっこ遊びを進める ○自分の思いや考えを伝え合う喜びを味わう ・考えたことを話し，相手の話を聞いて遊ぶ

2　実践「思いや考えを伝え合って遊ぶ」

(1) 実践事例

ごっこ遊びの題材として幼児がこれまでの園生活を振り返り，体験したことをもとに，遊びへと展開していくため話し合うことにした。

ⓐⓑⓒⓓ：援助の視点　アイウエ：環境構成

①集まりの場面で体験したことを話したくなる姿(11 月 25 日)

◎保育教諭の援助	☆環境構成
ⓒ　共感し，受け止め，探り出す **ⓓ　つなげる** 園生活で体験した遊びを思い出すことができるように，一人一人の話に共感し，受け止め，それぞれの思いや考えをつなげる援助を行った。	**エ　子どもが振り返る環境** 十分に思いが伝えられる安心した雰囲気の中で話し合える場を設定し，今までの活動の様子を写真で掲示し振り返りやすい環境を整えた。

《事例１》「どんなことして遊びたい？」

これからどんな遊びをしたいか，クラスで話し合いの場を設けた。話し合いを進めるうちに，遠足で行った動物園から動物ごっこをしたいという声があがった。
すると，一人の幼児が読み聞かせの絵本「十二支のおはなし」を思い出し，「十二支の生き物になって遊ぼう」と提案した。保育教諭が十二支のお話にどんな生き物が出てくるのか聞いたところ，すぐに名前を答えられない様子だった。

保育教諭：「どうしようか？」
幼児：「みんなが，知っている生き物にする」
幼児：「ザリガニになりたい！だって，(ごっこ遊びは)ザリガニになるってことでしょう？」
幼児：「じゃあ，カマキリは？」
幼児：「ちょうちょうは？」

自分達がこれまで関わってきた生き物の名前がどんどん出てきたことから，生き物が出てくるごっこ遊びをすることになった。

◇保育教諭の見取り◇

４月の入園当初から，幼児は敷地内にある「せせらぎ」とよばれるビオトープで生き物たちと関わってきた。そのため，これまで親しんできた生き物の話題になると，幼児が話したい気持ちになり，思いや考えを伝えようとする姿がみられたと考える。事例１の姿から，せせらぎで遊び，関わってきた体験は「心を動かされた体験」として残っていると捉えた。

・実践①を終えて次の実践への視点

保育教諭は虫の絵本や図鑑等を用意し，なりきるための素材として使えそうな布や廃材等を準備し子どもがしたくなる環境構成を準備することにした。イメージして表現

することに抵抗感が強い子には，見守り支える援助が必要であると考えた。
　話し合い場面では，列になって集まったため，保育教諭と幼児とのやり取りになってしまった。また，幼児同士が互いの表情が見えづらく，思いや考えが伝わりにくいように見えた。そこで，振り返りの場面や話合いの場面では，環境の再構成を行い，円になって話し合うことにした。

11 月 25 日の話し合いの様子

その後の話し合いの様子

②イメージを共有する姿(11 月 26 日～11 月 29 日)

◎保育教諭の援助	☆環境構成
ⒶⒶ　用意し，見守り，支える これから展開する「ごっこ遊び」における幼児の姿を予想し，教材教具を用意した。ごっこ遊びにおいては，幼児が遊びを楽しめるよう見守りつつ必要に応じて支える援助を行った。	ア　子どもがしたくなる環境 幼児が興味関心を持ってごっこ遊びを進めていけるように，道具作りのコーナーを設けた。また，すぐに生き物になりたくなるよう，池に見立てたブルーシート敷いて，遊びの環境構成を行った。

《事例２》「ちょうちょうになろう」(11/26)
　衣装ケースから黄色のベストを見つけた幼児が，それを着てちょうちょうの動きをし始めた。すると，ちょうちょうになって遊んでいる他の幼児を見つけて，側に近づいた。互いに手をパタパタ動かしながら，目を合わせ「ニコッ」と笑い，ちょうちょうになりきって遊ぶ姿が見られた。

ちょうちょうになりきる姿

《事例３》「ザリガニの結婚」(11/28)
　３～４人の幼児がブルーシートの池の中でザリガニになって遊んでいた。すると，一人の幼児が「あっ！」と何かを思い出した様子を見せ，他の幼児に「結婚しよう」と声をかけた。声をかけられた子は，迷わず「うん！」と言って，その場に一緒に寝転び，しばらく目を閉じて，じーっと動かずにいた。それを見ていた保育教諭や周りの幼児は，「ザリガニの結婚ってそういうことね」と言い合った。

ザリガニの結婚を真似する姿

◇保育教諭の見取り◇
　事例２において二人の幼児は，数日間ちょうちょうになりきって，一緒に遊んでいた。言葉のやり取りはほとんどなかったが，お互いに目を合わせて「ニコッ」と笑う様子から，お互いにイメージを共有し，気持ちを通じ合わせながら遊ぶ姿が見られたと捉えた。事例３において，ザリガニの結婚という遊びが見られたのは，園生活の中でザリガニを捕まえ，飼育・繁殖させた共通の体験があったからだと考える。ザリガニになった幼児が「結婚しよう！」と声かけしただけで，相手の幼児が応じることができた姿から共通の体験をもとにイメージを共有して遊ぶ姿が見られたと捉えた。

・実践②を終えて次の実践への視点
　実践②において，子どもたちがごっこ遊びをしたくなる環境を整え，見守り，支える援助を行ったことで，自分がイメージした物になりきる姿は見られたが，思いや考えを言葉で表現してごっこ遊びをする姿は少なかった。幼児はごっこ遊びにおいて，

生き物になりきって動いたり，道具を作ったりすることに楽しさを感じているため，言葉のやり取りがなくても遊びを進めていけるように見えた。その姿を踏まえ，保育教諭は，幼児が生き物の役を変更したり，役同士が関わったりして言葉でやり取りしながら遊びを進めていけるように援助する必要があると考えた。幼児が役になりきって遊ぶ時間が増えるように道具作りのための材料を少なくする等，製作コーナーの環境について再構成することにした。

③思いや考えを伝え合う姿(12 月 3 日～12 月 6 日)

◎保育教諭の援助	☆環境構成
ⓑ　指導し，助言し，共に行う 保育教諭は，遊びの中に入り，ごっこ遊びを共に行いながら，幼児が言葉を使ってイメージを共有し，遊びを展開できるように援助した。	**ウ 子どもが取り組む環境** 幼児が「作って遊ぶ」から「なりきって遊ぶ」姿へ展開していけるよう，道具づくりの材料を少なくする等，環境の再構成を行った。また，幼児と話し合いながら，生き物が住む家づくりを進めた。

《事例４》「ちょうちょうをたべにいこう」(12/3)

毎日ちょうちょうになって遊んでいた数名の幼児が，「今度はザリガニになろう！」と言って，ザリガニの池に移動した。しばらく，ザリガニのハサミを動かして遊んでいると，お腹が空いたという話になった。Ａ児は「ちょうちょうを食べに行こう。本物のザリガニはちょうちょう食べるでしょう」と言って，食べに行こうと提案した。その後，ちょうちょうの所へ行って，食べる真似をする様子が見られた。そこで保育教諭は「ザリガニがちょうちょうを食べること」について，幼児がどのように考えているのか，翌日話し合うことにした。

保育教諭：「ちょうちょうを食べちゃっていいのかな？」
他児：「やっぱりかわいそうだね」**①ちょうちょうの視点**
Ａ児：「でも，(ザリガニは)お腹空いてるよ。」**②ザリガニの視点**
他児：「でも，みんな食べられたら，いなくなっちゃう」**③ごっこ遊びの視点**
(それぞれの考えを伝え合う姿が見られた)
他児：「わかった！本当は食べるけど，これはウソ(ごっこ)だから，仲間になろう」
Ａ児：「お腹が空いたらどうするの？」
他児：「それなら，エサを作ろう」

その後，エサ作りへ展開し，紙を丸めてエサに見立て食べて遊ぶ姿が見られた。

みんなで話し合う姿

◇保育教諭の見取り◇

事例４において，幼児は①ちょうちょうの視点②ザリガニの視点③ごっこ遊びの視点と３つの視点から話し合いを進めていた。保育教諭は幼児が何を考えているか理解しようとしながら共に話し合うことで，幼児が話しやすい雰囲気を作ることができたと考える。さらに，自分の思いや考えを周囲に受け止めてもらうことで，「伝えたい・聞いてみよう」という幼児の姿につながったと捉える。

また，小道具作りの環境を再構成し，材料を少なくしたことから，幼児が生き物になりきって遊ぶ活動が増えた。さらに，生き物の家を行き来して遊ぶように保育を展開したことで，他の役同士の関わりが増え，ごっこ遊びを進めるために，思いや考えを伝え合う姿が見られたと考える。

・実践③を終えて次の実践への視点

事例４における幼児の姿を踏まえ，どうしてエサ作りをすることになったのか，クラスで伝える場を設け，他の役の幼児も一緒に遊びを進めていけるように，つなげる援助を行う必要があると考えた。また，幼児が思いついたことを表現できるよう，材料を準備し，生き物の家についても環境を再構成することにした。

遊びを共有し，つなげる援助

ちょうちょうのエサ作りを，クラス全体に伝える場を設け，他の幼児も一緒に遊びを共有できるようつなげる援助を行った。

生き物の家の配置を再構成

家の場所を移動し，家の中が広くなるようにすることで，幼児が中に入りやすいようにした。また，仕切っていた段ボールを可動できるように工夫し，子どもが取り組む環境の再構成を行った。

④思いや考えを伝え合う喜びを味わう姿(12 月 10 日)

本時□日案□(12 月 10 日)

幼児の姿	ねらい	内容
・互いの家を行き来しながら、イメージしたこと(疲れたから、ジュースを飲もう！等)を共有し遊ぶ姿が見られる。 ・自分たちでイメージしながら「虫」になりきって遊ぶ姿が見られるが、追いかけっこになってしまう子がいる。 ・活動のイメージが出来ず、友だちの遊ぶ姿を見ている子がいる	○友達とイメージを共有しごっこ遊びを楽しむ ○自分の思いや考えを伝え合う喜びを味わう	・友達と一緒に、自分達で考えたごっこ遊びを進める ・考えたことを話し、相手の話を聞いて遊ぶ

・これまでの幼児の姿□○予想される幼児の活動□□◎保育教諭の援助□□☆環境構成。

ちょうちょう

・作ることに抵抗感が強かった子も、自分なりのちょうちょうの姿を楽しむ姿が見られるようになってきた
○イメージを共有しながら、自分なりのちょうちょうの羽を動かし、友だちと言葉を交わし、ちょうちょうが作ったクッキーやタピオカジュースを飲んで遊ぶ姿が見られる

◎イメージを共有し遊びを進めている子へは、用具や教具の準備をしつつ見守る援助をする
◎自分なりのちょうちょうを楽しむ子へは、その姿を受け止め、聞きながら、友だちと遊びを展開していけるよう繋いでいく
◎自分たちで活動を進めていく時には、その時の子どもの思いや考えをよく聞き、受け止め、共感する
☆子どもがしたくなる環境

カマキリ

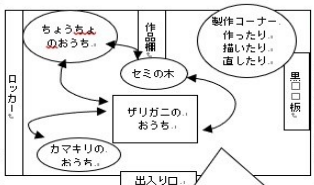
・一人だったが、2～3人に遊ぶ子が増えた
・遊ぶ人数が増え、カマキリの家が壊れることもあったその都度、作り直しながら、壊れないような遊び方を考える場面があった
(段ボールを増やす案、人数制限の案)
○カマキリの家を巡って出入り口の仕方を考え話し合って遊ぶ姿が見られる

◎なりきっている事を認め、はじめから取り組むＹ児のアイディアや、Ｙ児の持つカマキリの世界観を他の園児に知らせ、発表する場面を設け、聞いてもらう心地よさが味わえるようにする
☆子どもが使いやすい環境(出し入れしやすく、扱いやすいカマキリの家を置く場所)

トンボ

・トンボになっていた子が、ちょうちょうやザリガニに影響され、遊ぶ子が少なくなっている
○新たにトンボになりきった遊ぶ子がいる

◎トンボになる楽しさを伝えながら保育教諭も、一緒になって遊び楽しさを共有する



〈援助〉それぞれの遊びを繋げる
◎幼児の思いや考えを代弁しお互いのも嫌考えを繋いでいけるよう援助をする
◎幼児が互いの遊びを行き来出来る場に遊びと遊びを繋ぐ援助をする

バッタ

・なりきって遊ぶ姿が見られ、セミのグループから、「入っていいよ」と言われ、木に見立てた段ボールの周りで遊ぶ姿が見られる

◎用具や教具の準備をしつつ見守る援助
◎バッタの姿を受け止め、友だちと遊びを展開していけるよう繋いでいく

製作コーナー

・自分のイメージした虫のパーツを直し、友達の直すのを手伝う姿が見られる

◎試行錯誤しながら直していく姿を見守る。必要に応じて援助する
☆子どもが使いやすい環境(廃材を選ぶことができる・高さや位置に配慮)

セミ

・段ボールに木の絵を描いた画用紙を貼っている。その木を中心に「みーん、みーん」とセミになりきって保育室の周りを飛んでいる
・「おしっこ！」と言いながら、他の子にかけていく
・段ボールの木が倒れるたびに、倒れない方法を考える場面がある
○木に見立てたダンボーに樹液が出ているところを作るかで意見が分かれ、相談しながら進める姿が見られる

◎セミのとまる木が、何度も倒れてしまうので、子ども達と一緒にどうすれば倒れないか考える
◎「先生も必要な道具を持ってくるね」と保育教諭も一緒に活動を進めていく→必要に応じて道具の提供をし見守る援助をする
☆子どもが使いやすい環境(廃材の用意。扱いやすい大きさの段ボール)
☆子どもが取り組む環境(他の遊びのコーナーとぶつからないよう配置)

ザリガニ

・数名の子が自分たちでブルーシートを敷き、ザリガニのお家としてその中で遊び、ブルーシートから出た時には「だっそう」という言葉を使い、以前にも飼育していたザリガニが水槽から逃げ出した時の経験を遊びの中でも使っている
・ザリガニじゃんけんを考え、ザリガニのはさみでじゃんけんをする遊びが始まっている
○旅に出るイメージしながら「どこに行こうか？」と考えを伝え合いながら遊ぶ姿が見られる。

◎自分達で遊びを展開し、気の合う子で遊び始めているので、必要に応じて遊びに入る
☆子どもが使いやすい環境(ザリガニの家として、イメージしやすく園にあったブルーシートを活用。子ども自身にも取扱いしやすく身近な素材)

◎保育教諭の援助	☆環境構成
ⓓ　つなげる援助 **ⓒ　共感し，受け止め，探り出す** エサ作りの活動について,他の幼児が共有できるよう,つなぐ援助を行った。また,幼児が考えたことに共感し,受けとめる援助を行った。	**イ　子どもが使いやすい環境** エサ作りのための材料を準備し,道具作りのコーナーを再構成した。また,役同士の行き来がしやすくなるように,生き物の家の設置場所や大きさの調整を行った。

《事例５》「たくさんの子が食べに来てくれてうれしい」

事例４のあと，話し合いの場でエサ作りについて紹介したことで，次の日から，他の役の幼児もエサ作りをする姿が見られるようになった。

バッタグループは，エサとしてポップコーンを作っており，自分達の好みの味にする相談をしていた。すると，他の生き物に変身した数名の幼児がやってきて，何を作っているのか聞いた。Ｂ児は「ポップコーンだよ。味はね･･･。」と説明した。数名の幼児はそれぞれポップコーンを食べて「おっ！おいしい」とやり取りする姿が見られた。Ｂ児は，バッタグループの子と目を合わせて笑顔で応じていた。振り返りの場面で，Ｂ児は自ら手を挙げ，友達と一緒にポップコーンを作ったことやチョコレート味やレモン味，様々な味を作ったこと，たくさんの子が

ポップコーンの味を確認する姿

食べにきてくれて楽しかったことについて，発表する姿が見られた。それを聞いた他の幼児も，「僕，食べてない」「どこで食べることができるの？」等と，B児の話した内容に質問したり，自分の思いを話したりする姿が見られた。

振り返り場面で発表する姿

◇保育教諭の見取り

これまでB児は，一緒に遊んだことが少ない子に対して，自分の思いや考えがあっても，伝えることができずにいた。しかし，事例５においては，自分達の考えた遊びを周囲の子に自信を持って伝え，ポップコーンの味を「おいしい」と認めてもらったことに，喜びを感じている様子が見られた。振り返りの場においても，積極的に遊びが楽しかったことを発表し，それを聞いた幼児も一緒に話し合う姿が見られた。このことから，幼児が遊びを楽しむ中で，思いや考えを伝え合う喜びを味わう姿が見られたと捉える。

(2) 幼児の変容（抽出児）

思いや考えを言葉で伝え合う姿が少ない子１名，友達の話を聞くことが難しい子１名，友だちの話を遮って話そうとする子１名，計３名を抽出児として取り上げた。保育実践を進める中で，保育教諭は見守り，支え，共感し，受け止め，他の幼児とつなげる援助を行ってきた。

	幼児の姿	保育教諭の援助	幼児の変容	保育教諭の見取り
B児	自分の思いや考えはあるが，**自分から話すことは少ない。**また，自分の気持ちが乗らないと話さない場面もある。	**ⓐ見守り，支える** **ⓓつなげる援助** ごっこ遊びの姿を見守り，必要に応じて受けとめる援助を行った。また，みんなの前で本児のエサ作りが楽しかった思いを伝える場面を設け，本児の思いを友達とつなげることができるよう援助した。	**自分から発表の場で「話したい」と手を挙げ，友達を誘い数名で発表する姿**が見られた。その後も，本児を中心にエサ作りを展開し，互いの考えを聞き遊びに取り入れながら自信を持って遊ぶ姿が見られた。《事例５》	みんなの前で発表する場を用意し見守る援助を行った。その中で，本児の良さを認め他の幼児とつなげる援助が本児の伝え合う姿につながった。
C児	話す事は大好きだが，**友達の話を聞くことが難しく**，自分の思いが通らないと癇癪を起こす場面が見られる。	**ⓐ見守り，支える** **ⓒ共感し，受け止める** 十分に思いを聞き，受けとめ寄り添う援助を行った。ごっこ遊びを進める中で，物の貸し借りやどうやって遊ぶのか，本児が友達の考えを聞き，受け入れられた時には，みんなの前で認めていった。	自分考えが周囲に受け入れられ，認められる経験を積み重ねていくなかで，**話を聞こうと待つ姿**が見られるようになった。癇癪を起こす回数が減り，自分の気持ちを調整する時間が，次第に短くなってきた。	本児の姿を肯定的に受け止め，周囲にも自分の考えを伝えつなげる援助を行ってきた。友達との関わり方も見守る援助を行ってきたことが本児の変容につながった。
D児	自分の気持ちは上手に話すが，**友達の話を遮って，話そうとする姿**が見られる。自分優位に遊びを進めていこうとすることがあるので，時々トラブルになることがある。	**ⓒ共感し，受け止める** **ⓓつなげる援助** 本児の思いついた考えを，ごっこ遊びの場面や全体の振り返りの場面で，十分に認めていった。友達の考えや思いを聞く場面では，相手にも思いや考えがあることを伝えていく援助を行った。	数日間，同じ生き物のグループの子と遊ぶことで，一緒に遊ぶ友達にも，思いや考えがあることに気づき，**話を聞こうとする姿**が見られるようになってきた。	本児の「話したい！」という強い気持ちを受けとめ共感し，他の幼児とつなげる援助をしてきたことが，聞こうとする姿につながったと思われる。生活経験の中で，くり返し伝えていく必要がある。

(3) 考察

本研究では，園生活の体験からごっこ遊びを展開していく中で，言葉を育む環境構成と，保育教諭の役割と援助について視点を設け，研究を進めていった。

保育実践において，幼児はこれまでの園生活を振り返り，自分たちが関わってきた生き物になって，ごっこ遊びを展開していった。幼児にとって，毎日の生活の中にある「せせらぎ」や「生き物」との関わりは，とても身近な「心を動かされる体験」だったと思われる。その体験をもとにイメージを共有し，ごっこ遊びを展開したからこそ，幼児が生き物になりきって遊ぶ姿が見られたといえる。しかし，ごっこ遊びへの展開だけでは，言葉による伝え合う姿は少なかった。そのため，保育教諭は幼児の姿を捉え，遊びの展開を見通し，援助や環境構成の工夫を繰り返していった。特に，遊びの場においては，保育教諭が遊びの中に入り，幼児同士をつなげる援助を行った。また，クラスの話し合いの場においても，幼児が思いや考えを伝え合う機会を設けていった。このことから，幼児の遊びが広がり，幼児同士が思いや考えを伝え合う姿につながっていったと考える。

実践において，保育教諭は幼児の「話したくなる，伝えたくなる気持ち」に寄り添い，幼児一人一人に丁寧に関わっていった。また，幼児は友達と一緒にごっこ遊びを楽しむ中で，思いや考えを伝え合うことを楽しむようになっていった。このような保育教諭や友達との関わりを通して，幼児は，思いや考えを伝え合う喜びを味わうようになったと考える。「伝えたいことがあり，伝えたい人がいる」ことが，伝え合う喜びを味わうためには，とても重要であると思われる。

Ⅵ．成果と課題

1　成果

(1) 幼児はごっこ遊びを楽しみ，思いや考えを伝えようとする姿が見られた。また，保育教諭が，幼児同士の対話する姿を捉え丁寧に関わり，自分の思いや考えを受け入れてもらう経験をすることで，相手の思いや考えを聞こうとする気持ちの育ちにつながった。

(2) 園生活の体験から，ごっこ遊びを展開していったことで，幼児同士が共通のイメージを持ち，遊びを進めることができた。そのことが，さらに楽しく遊びたいという意欲になり，「話したい･伝えたい」気持ちになり，伝え合う喜びにつながった。

2　課題

(1) 幼児同士の伝え合いをさらに深めるために，遊びや振り返りの場面で，幼児同士を繋いでいく援助を工夫する必要がある。

(2) 保育を展開していく中で，遊びをさらに充実させるために，保育教諭は常に幼児の内的動機を読み取り，遊びの展開に合わせた環境の再構成や援助を行っていく必要がある。

《主要な参考文献》

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」内閣府・文部科学省・厚生労働省　フレーベル館　2018
「こどもの育ちと『ことば』」　松川利広　監修・横山真貴子編著　教育出版社　2010
「事例で学ぶ保育内容　領域　言葉」　無藤隆　監修・宮里暁美　編者代表　萌文書林　2018